阪東武者

（二幕）

人物

豐島太郎義近
畠山莊司二郎重忠
熊谷次郎直實
葛西平六秀重
西行法師
榛澤藤五（重忠の郎黨）
童金王
權内（義近の郎黨）
醫師
紫（義近の娘）

時——仁安のころ（今より八百餘年前）

處——武藏の國豐島の鄕

第一

（豐島太郎義近が館の一部、下手は奥に至るほど小高くなりて、その上に壯大なれども極めてプリミチープなる建築あり。その入口の、建築に比して極めて小さきと、何等の裝飾のなきとより、建物の裏側なる事を察するに難からず。その建物の前なる丸石を重ねたる階段を下れば、一面の平地にて、その上手の方に、松の大樹と霜に飽ける楓の大樹と枝をかはし、その下に稻荷の社あり。鳥居の額には平塚大明神と記さる。家の後（うしろ）館をめぐりて、自然石を積み累ねたる胸壁あり。近世築城法の源流として建築學者の保存につとめたげなる形狀なり。胸壁と建物との間に一條の路ありて、とろ〳〵下りとなる。路の幅は「源平盛衰記」なんどに見えたる搦手のそれよりも尙狹く、徒立二人の辛うじて竝び歩むに堪ゆるほどなり。胸壁を隔てゝ遠く武藏野の末に、甲信の山々と富士の高根とを展望し得べし。

秋ふかく落葉滿地、斜陽さびしう澁柿の枝にかゝる。

豐島が息女紫、胸壁にもたれつゝ、崖下を眺めふける。

童金王、家の前なる莚の上にあぐらかきて、臼にて粉をひき居る。）

紫　　おゝ狩鞍の人たちゞや。川を越えて來る。

金王　（身を起して紫の側に來り）殿の御歸館ぢや。あゝ、大きな鹿ぢや。二人の勢子でさへ昇き切れぬやうぢや。わしも侍になつたら、森へいつて獵をするのぢや。

紫　そちは、もう程なう侍になれるではないか。

金王　わしは、今直ぐになりたいのぢや。

紫　その樣な出來ぬ事を願はずと、まあ精出いて、粉をひいたがよい。父樣の目に入つたらまた叱られやうぞ。

金王　この樣なことは女子のする業ぢや、わしはこの樣な事をする年齡ではない。わしはも少し大きうなつたら、こゝには居らぬのぢや。

紫　こゝには居らぬ？　何處ぞでもつと好い主取りをしやうとか。

金王　殿は此上もないよい主ぢや。が、わしは奉公が忌なのぢや。

紫　でも、その樣な事をしたら、直ぐにつかまつて連れかへされうぞ。

金王　わしは海を越して彼方の國へ行くのぢや。さうすれば大丈夫ぢや。（云ひつゝ松の幹につけたる目標に指をあて）まあ、これを御覽じませ。これは三月前にわしが刻つたのぢや。こゝへ頭がとゞくやうになつたら、此館を出てしまふのぢや。

紫　わしが父樣に密告けたら何としやる。

金王　それは大丈夫ぢや。あなたは美しい。美しい人はその樣な事はせぬものぢや。

紫　（笑ひつゝ）それなら密告けるのは止すとしやうが、如何してそのやうな目標をつけたのぢや。

金王　これは熊谷の次郎どのが、身長の高さぢや（手をのばして）もう、これだけでとゞくのぢや。（胸壁の方を見かへりて）海もこゝからはさう遠くはない。この程も湯島へ用足しに行たら、すぐ側に見えた。

紫　海のむかふへ行たら何をしやる？

金王　武藝や兵法を習ふて名ある勇士になるのぢや。そして源氏の棟梁となつて郎黨を澤山つれて歸つて來るのぢや。それからあなたを想ふて居るあの熊谷の次郎どのを一刀に斬殺して、あなたをわしの女房にするのぢや。

紫　でも、海の彼方にはこゝらよりは綺麗な女がたんとあるさうな。

金王　（當惑げに）それは嘘ぢや。

紫　でも、それが眞實であつたら。

金王　（ちよつと考へて）それならば、もう歸つては來ぬ。

紫　この子は、ほんに誠氣の少ない子ぢや。そなたはそれをあの法師どのに聞きやつたか。

金王　いゝえ、西行さまはとんとその樣な話はなされぬ。わしは熊谷どのゝ郎黨から聞いたのぢや。

紫　その様な事が父様の耳に入つたら、また折檻を受けうぞ。

金王　（瀝面づゝりながら）その中にはいんでしまふ。（崖下を見て）やつ、誰やら二人こちへ攀つて來る。一人は殿ぢや。

紫　して、尙一人は。

金王　木間がくれで能う見えぬ……おう、又森の外へ出た。熊谷の次郎どのさうな……いや、左樣では無い。あれは葛西の平六どのぢや。

紫　なに平六どの？

金王　あの和郎は三日の間に四たびわせられた。ほんに阿呆な和郎ぢや。あなたがあのやうな詠歌者とやらを好くと思ふて居るのが、自體阿呆ぢや。

紫　でも詠歌者といふものは、そのやうに賤しいものではない。それにあの人は都でも名を知られた詠歌者ぢやといふことぢや。

金王　なにか知らぬが、筆一本では戀敵の熊どのが鋭どい太刀先は受けおほせはしまい。おゝ、殿は搦手の方へまはられた。粉の事はなにも云ふてはくださるな。

（金王はあわたゞしく上手へ立去る。紫は打笑みつゝ、家の裡へ入る。

後の阪路より狩鞍のいでたちしたる豐島太郎義近と、華やかなる直垂して、面にも白きものなど塗りたる葛

西平六秀重と相携へて、胸壁の前に上り來る。二人は尙みちすがらの對話をつゞく。）

義近　われらとて風雅の道に志のないわけではない。が、幼い時から兵馬の中に身を置いて、文字三昧に送るべき暇とては一日もなかつた。今更敷島の道もけうとい事ぢや。はゝゝは。

秀重　左樣仰せられな。朝に道を聞いて夕に死するも可しとは、唐の聖も仰せられた。御身とはゆかりの深かつたけに聞く八幡太郎どのなんども、匡房の卿が後言を聞いてから兵法にも和歌の道にも心を入れられた。それゆゑに、勿來の關の歌は弓矢の道よりも譽が高うなつた。それに……

義近　（家の方を見て）おゝ娘が來る。あれは女子ぢや。年齡も若い。あれにずゝめて下され。

（紫また家の奥より出て來る。）

義近　娘、葛西の若殿ぢや。わしが衣服かへるまで御もてなし申せ。

（興津義近は家の裡に入る。紫は徐かに葛西秀重の方へ來る。葛西はおもはゆげに松蔭に立つ。）

紫　能くこそ、おいでなされました。

秀重　（勇氣を鼓して）あな、いとをしのわが紫の君、たゞ君が一本の故にこそ、この武藏野の千草百草、みな哀れとぞ見ゆるものを、いつ手につみて見せ給ふぞ。「けさは霞の立ちぞわづらふ」と詠ませ給ひし、源氏の君のそれよりも切なるわが戀路、何とぞふかくも汲み給ひて……

（秀重は都めきたる語づかひして、紫の手を握らむとす。紫は之をふりはらひ）、

紫　武藏野の草ふかい田舍で育つたわたしには、その樣な風雅な語はわかりませぬ。それに「戀」の「おもひ」のといふ事は、もうわたしの前では云ふまいといふ誓言を御立てなされたではござりませぬか。

秀重　「つれもなき人を戀ふとて山彦のこたへするまで歎きつるかな。」さあ、これが私の心ぢや。この歎き聲さへ聞ぐまいとは、餘りにもつれない心ぢや。兎も角もまあ下に居て、わしの詠んだ戀の歌を聞いて下され。

（秀重は强ひて紫をかたへの石に腰打かけさせ、おのれも木の根に腰をおろす。夕風一陣落葉しげし。）

紫　その樣な都めいた事は、わたしなぞには分りませぬ。

秀重　いや〳〵、「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉」となつたとは、あの紀の貫之朝臣も云はれた。わしの心の誠を詠んだ歌が、あなたの心の誠に感ぜぬといふいはれは無い。わしはゆふべ、秋の夜長を一睡もせずに百首の戀歌をよんだ。まづその一つは……

紫　（うるさげに）わたしはけふは頭がいとうて……

秀重　目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせるは此歌の德ぢや。あなたの頭痛もたちまち癒らう。そこで初めの歌はかうぢや。（懷ろより懷紙をとり出して讀む。）「秋の夜も名のみなりけり逢ふといへば、事ぞともなく明けぬるものを。」

紫　待つてくださりませ。それではわたしとあなたともう逢瀬をたのしんで居るやうに聞えまする。滅多な歌をよんで下されては迷惑いたしまする。

秀重　その樣にきつうはいはれぬものぢや。人はもう二人の語らひが深い樣にいふて居る。「みちのくにありといふなる名取川、なき名とりては苦しかりけり。」

紫　それほどに苦しければ、もう〳〵わたしの許へはお出でにならぬがよろしうございます。

秀重　「夢にだもあふことかたくなり行くは、我やいをねぬ人や忘るゝ。」

紫　それはあなたのよみ歌でございますか。古今集の中にある歌と能う似て居りますな。

秀重　どうしてあなたは古今集を。

紫　ゆふべ、この家へ泊られた行脚の法師どのから借りて見ました。

秀重　なに、行脚の法師？

紫　はい、西行といふ貴とい聖とやら。

秀重　なに、あの西行法師が！……かの人は今の世に稀れなる和歌の達人、わたしも是非御引合せが願ひたい。が、それは後の事、あなたも古今集に興を催ほす程ならば、わしとは此上もない似合ふた妹と背ぢや。

紫　わたしは武士の娘ぢや。あの樣な和歌集とやらには興がない。

秀重　（懷紙を引むしりて）おゝ、それ故あなたは熊谷の次郎が好きなのぢやな。あのやうな學もなく、才もなく、人殺す業の外には、何一つ知りもせぬ野獸のやうな男子を、何處が好うて思ふのぢや。

紫　でも、あの人は武藏七黨の旗頭ぢや。打物取つてはならぶものもない勇士ぢや。

秀重　わしは幼ない時より上洛して、物學ぶ道にのみ心をひそめて居たが、さりとてわしも葛西清重が息子ぢや。弓矢の道とて熊谷の次郎ごときに劣らう筈はない。（俄かに身を起して）あなたさへわしを思ふてくれるなら、今からは硯をくだき筆を折つて、打物業に身を任さう。

紫　その樣な事をしてももう遲い。

秀重　それは戀の力を知らぬ人のいふ事ぢや。妹が嬉しき一言には、豐島の川波も片手もて堰止むる。紫どの、若しわしが熊谷の次郎をたゞ一打に仆しなば、あなたはたしかに……？

紫　（慌てゝ）いえ〳〵、わたしにはその樣な約束は出來ませぬ。

秀重　併しわしの胸一つに思ふて居るだけはかまひますまい。

紫　それはあなたの心の儘でございます。

秀重　おゝそれ聞いて心が落ついた。かうと知つたら、役にも立たぬ歌よまう爲め、あたら日を無效に過しはせなんだに。これでは貫之が古今集の序も怪しいものぢや。

・（此時家の裡より、義近金玉の襟髮をとりて、あら〳〵しく出で來る。）

義近　そちの身長がいくらあらうと、年齢がいくつにならうと、それをおれの知つた事か。女の手業でも小兒の仕事でも、おれのいふた事に違背はならぬぞ。（臼を見て）やい、まだ三分の一も粉を磨き置らぬ。明後日は佛の日ぢやに何といふなまけ方ぢや。

金王　きのふ權内どのが手擒にして來た狼に、餌をやりに行つたばかりでござります。

義近　狼の餌より自分の餌に氣をつけよ。おれの用を怠つたら、生涯その口へは餌がはいらぬぞ。

（金王は澀面つくりて、また粉を磨きはじむ。義近の怒りの聲に驚き、柴の側を離れて、俄かに胸壁の方に走き居る秀重は、この時崖下を見つめつゝ）

秀重　騎馬武者ふたり、郎黨とても引連れず、此方をさして急いで來る。

義近　（胸壁に近づき）ほう、一人は傷を負ふて馬上にも堪えぬらしい。旅の武士が不慮の怪我をしたと見える。われらを頼みに來たは淺からぬ宿緣ぢや。わしは迎へに行て來やう。娘、離亭を用意せえ。

秀重　わたしも御手傳致さう。

（義近と秀重とは母屋の方へ行く。柴は上手へ入る。）

金王　（また臼をまはしつゝ）口を乾される前には海を渡つてしまふわ。

（西行法師母屋より出で來り、徐かに落日に對す。）

金王　おゝ法師どのぢや！　少し聽きたいことがある。

西行　どの様なことぢやな。

金王　わしの殿はこの粉をわしに磨けといふ、が、これは女子の仕事ぢや。武士の業ではないと思ふ。法師どの、幼い時には、この様な事はしはせなんだらう。

西行　主のいひ付けを守るのが、何より尊い事ぢや。それに粉を磨く方が、人を殺す業よりはずつと勝れた仕事ぢや。

（西行阪路を下り行かんとす。）

金王　法師どのは何處へ行かつしやる。

西行　秋の夕は淋しいものぢや。それ故じつとすわつては居られぬのぢや。

金王　法師どのにも淋しいといふことがあるものか。

西行　法師も人ぢや。

金王　小供も人ぢや。わしも行かう。粉はあすの事ぢや。

西行　おゝ來い〳〵。

（西行と金王と相伴ひて阪路を下る。畠山莊司二郎重忠は、義近の肩にすがり跛ひきつゝ、母屋より出で來る。）

義近　も一度こゝで休みなされ。（石に腰かけしむ）。醫師もやがて來やう。離亭の掃除も程なう濟まう。

重忠　不慮の災難から、いかい御世話に相成りまする。況して近ごろは源平ふたつに立別れ、互ひの親

義近　みも打絶えて居つたに。
　いざといふ時には、また戰場で逢ふまでぢや。まづそれ迄は心置なう寛いで居られえ。
　（紫上手より入來る。）
義近　畠山どの、これが娘ぢや。紫、この方は莊司二郎重忠といふ關東隨一の若武者ぢや。相模から故郷への途すがら、狂ひ猪に出で逢ふて手も無くそれははり殺したが、人の運は測られぬものぢや。その猪を捕らうために作つた陷穽にはまつて、思ひもかけぬ怪我をせられた。
重忠　二十年來弓矢の家に育ちながら、面目もない仕誼でござつた。
紫　離亭の仕度は出來ました。ともかくもあちらで。
　（義近の郎黨權内は母屋の裡より、重忠の郎黨榛澤藤五と、醫師とを伴ひ來る。藤五は原人の俤を存したる、長大なる軀幹と、粗野なる言語とを有する若者なり。）
義近　おゝ重忠どのゝ家人が見えられた。
藤五　若殿、馬の始末はもうついた。これからは若殿の始末ぢや。
義近　おゝ醫師どのも見えられたな。
醫師　病人は誰ぢや。
義近　旅の人ぢや。兎も角もあちらへ行かう。

（藤五は重忠を扶け、義近及び醫師相伴ふて上手へ入る。
日稍くらし。紫落葉の下に立ちて重忠を目送す。
熊谷次郎直實母屋より出で來り、紫を見入る。稍間。）

直實　紫どの。

紫　何ぞ、用ばし？

直實　また戀ぢや。

紫　戀の話にはもう倦いた。

直實　それは知つて居る。都下りの似而非公卿めが和歌とやらに迷ひ込んで、弓馬の德を忘れたそなたぢや。その心の迷ひはわしが解いてやる。

紫　（わざと冷笑して）秀重どのは、都にも並ぶものゝない詠歌者どうな。それに姿もうつくしく、擧止もやさしい。けふもわたしの爲めにかういふ歌を詠まれた……

直實　（腹立しげに）えゝ、その樣なじやらくしした事は聞きたうない。心の底のせつなさを打わつた歌を聞くのは、女の身には嬉しい事ぢや。

紫　假名を三十や四十、一つにする位はどんな馬鹿にも出來るわ。

直實　でも、あなたには出來まい。

直實　歌を作つたら、屹度そなたはわしに從ふか。

紫　お客人のもてなしを忘れて居た。

（紫は笑ひながら上手に入る。）

直實　（紫の後姿を見おくりながら）腰折一つよめぬ故、思ふ女が手に入らぬとは、弓矢の道も地に墮ちた。（間）葛西平六の阿呆にさへ出來る和歌とやら、武藏七黨の旗頭たる熊谷直實に出來ぬ筈はない。あ秋の夜や……秋の夜や……

（葛西平六秀重は悄然として姿を阪路より現はす。）

秀重　次郎、こゝにか。

直實　平六か、一つの戀に、二人は無益ぢや。一つの生命はおれがもらふぞ。

秀重　（太刀に手をかけ）おれが所望ぢや。さ、豊島河原へ行かう。

直實　能ういふた。

（兩人立去らんとす。阪路に西行と金王とあらはる。）

西行　まづ止らせられえ。

直實　法師どの、許されえ。

（兩人立去らんとするを、西行杖を横にしてとゞむ。彼が兩人に對する一刹那の心の閃きには、佐藤憲淸時代

の面目を彷彿せしむ。）

西行　兩人が爭ひのいはれは此小わつぱから聞いた。女一疋に二人の血を流すはおごりの沙汰ぢや、伜たち、まづわしと一緒に來られえ。忽ち煩惱の羈を絶つてやるわ。

（西行は先に立ちて母屋の方へ行く。若き二人は一種の威嚴に壓せられて、われにもあらず從ひ行く。金王は三人を見送る。

紫上手より出で來る。）

金王　法師め、餘計なところへ口を出した。

紫　法師どのが、何を。

金王　兩人の阿呆侍が、眞劍の勝負をしやうとしたを、法師どのが來て無事に濟ませた。

紫　それはよい功德であつた。

金王　なんのよい事か。面白い勝負を兒損ふた。

（榛澤藤五上手より出で來る。）

藤五　わつぱ、どの樣な勝負ぢや。

金王　女一人のために、男二人が生命のやり取りをしやうとした。

藤五　たわけた奴等ぢや。が、世間にはそのたわけばかりぢや。そこへ行くと此藤五などは、如何な女

が來やうと、蛆虫ほどにも思はぬわ。

紫　（笑ひながら）それは賢こい人ぢや。

藤五　わしは聖ぢや。たゞ一つ腹を立つのがわしの惡い癖ぢや。今もあの權内どやらへ膳を投げつけてやつた。

紫　（驚いて）あの權内へ？

藤五　あいつ、癪にさわる事をぬかし居つた。

紫　どの樣な事を。

藤五　わしの腹を底無しの池ぢやとぬかし居る。何の、あの樣なものゝ十杯や二十杯！

紫　それではわたしが給仕をして上う。もう一度喰べるがよい。

藤五　またにせう。腹が裂けさうぢや。

紫　それでもまだ足りぬのか。

藤五　酒がなければ心が足りぬ。

紫　でも、おぬしのお主から、決して酒は振舞ふてくれるなと、きつい斷りであつた。

藤五　あれが若殿のたつた一つの惡い缺點ぢや。……や、若殿がこなたへ見える。いひつけられた用事を忘れて居た。許されえ。

（藤五いそぎ母屋の方へ行く。

日全く暮れて月樹の間に昇る。虫の聲あはれ。

重忠杖に縋りてしづかに上手より出づ。）

紫　何としてこゝへは。

重忠　醫師の手當に、もう常と變らぬ心となつた。秋の夜の風情の面白さに、思はずあなたを驚かした。

紫　それは重疊でございました。さ、こゝへお凭なさりませ。あの、醫師はもう歸りましたか。

重忠　向ふの庭を通つて歸られた。あの者の話では、もう四五日は旅立はむづかしいとの事でございつた。

紫　御國許へは使者をおくつてある筈、心安く御逗留なさりませ。

重忠　御親子の御志は、身にしみて忝けない。

金王　怪我をしても構はぬ。早う馬で旅をする身になりたい。

重忠　おゝ興がる童ぢや。今は何をして居る。

金王　粉磨きぢや。あれは女子のする業ぢや。

重忠　人の語に背き得る程の身になるまでは、まあどの樣ないひつけにも從がふが可い。

金王　併しわしにも人の語に背ける時が來るでございませうか。

重忠　それは分らぬ。此世には強いものにしたがふものと、弱いものを使ふ人とがある。弱く生れたら

生涯人に使はれるのぢや。

金王　（腕をさすりて）わしには強い骨がある、強い筋がある。

（此時母屋の方にて人々の笑ふ聲、罵る聲、器皿の毀るゝ物音す。）

重忠　や、藤五めの聲ぢや。また何ぞ仕出かしたか。

紫　先程もうちの家來に膳を投つけたとか申して居りました。

重忠　その時も戒めては置きましたが、生れついての荒武者、狂ひ出したら誰が語でもとゞまらぬ。併しわれらに取つては忠義無二の郎黨、仕誼によつては後に圍ふて、此刀を拔かぬものでもござらぬ。

（またのゝじり騷ぐ物音。）

金王　（飛び上りて）一大事が初まつたな。（母屋の前へ駈け行きて、思はず歩みをとゞむ。）權内老爺め、火のやうに怒つて居るわ。

（權内は母屋より出で來り、重忠に近づく。）

權内　お客人、あなたの御家來の亂行を聞いて下さりませ。わしに對する無法の振舞、それはお客人も御承知、あれから臺所へ飛び込んで、酒瓶へ首をつゝ込む猩々飲み、果てはわれらが仲間を集めて、わがもの顔の振舞酒に、母屋はだれも彼も醉漢ばかりでござりまする。お客人から何とかいふて下さらいでは……

（藤五亂醉して入り來る。）

重忠　藤五、何とした。

藤五　好きな酒を飲ませぬと申す故、わざと飲んで〳〵飲んでやりました。

重忠　酒はおれが止めてもらふたのぢや。

藤五　併し、それを飲まずには生きて居られませぬ。

重忠　長い事ではない、我慢をせえ。よいか、今宵の事はわしが謝まる。明日からは慎め、よいか。

藤五　主のいひつけぢや。餘儀ない事ぢや。たゞ、それまで生命がつゞくか如何か。

金王　（手をたゝき）酒がなくて死ぬとは弱い生命ぢや。

藤五　おのれ、武士に對して無禮な事を……

重忠　（金王をうしろに圍ひながら）靜かにせぬか。（權内に向ひ）老人、今宵の事は、わしに免じて許して下されえ。

權内　恐れ入りました。

重忠　（藤五に）さあ、あちらへ行け。

藤五　（悄然として）とんだところで怪我をされたものぢや。

（藤五退場）。

權内　（金王に向ひ）狼めを家内へ入れぬと、また檻を破つて逃げ出さうぞ。

金王　おゝ、忘れて居た。行かう。

（權内と金王と、白をわきに寄せつゝ、母屋へ入る。）

（四圍寂寞、月漸く冴ゆ。）

重忠　おゝ靜かな事ぢや。

紫　あの御家來は、この様な靜かな處には馴れぬと見えまするな。

重忠　われらが秩父の館は人の聲、馬の嘶き、わめく音、打合ふ響きで、夜の神さへ眠れぬ程ぢや。（間）あなたはこの様な淋しいところが好ましいかな。

紫　何ぢや知らぬが、こゝは父様の家でござります。

重忠　それにしてもこゝは餘りに靜かぢや。生命がない。

紫　わたしも尙少し樂みが欲しい。こゝは餘りに物悲しい。それでも父様の家なら仕方がない。

（微かに野寺の鐘聲聞ゆ。稍しばらく間。）

重忠　（身を起し）夜は更けた。寢るとしやう。

紫　ようおやすみなさりませ。

重忠　さらば。

（重忠は立去りかけしが、やがて立止り、しげ〳〵と紫を見返る。紫も半ば恐るゝ如く重忠を見返る。重忠立戻りて）

重忠　紫どの、あなたには、もう約束の方がござるか。

紫　（烈しく驚きて身を引き）そ、その樣なものは……存じませぬ。

（重忠はしばらく佇みて紫を眺め入りしが、やがて思ひ返して上手へ立去る。紫は身をふるはして石の上に身をおろす。

やがて義近、欠伸しつゝ上手より出で來り、まはりを見ながら）

義近　お客人を外にして、思はず離亭で寢忘れた。（紫の姿を見て）あゝ、娘、如何してこの樣な處に居るのぢや。夜露は身の毒ぢや。さ、閨へ行かう。首をかゝれても知らぬ程に眠いわ。（娘の肩へ手をかけ、いぶかしげに）如何ぞしたか、ふるへて居るぞ。

（親子手を携へて母家へ入る。蟲の聲、落葉いよ〳〵しげし。）

幕

第二

前幕と同じ場處。數日の後。

阪東武者

（藤五は芝生の上に笑ひながら横臥し居る。金王その傍に立つ。）

藤五　わつぱ、それは確かゝ、屹度見たか。

金王　確かとも。熊谷の次郎め、眞面目な顏して、姫君に歌を讀んで聞かせて居た。而して自分が作つたのぢやといふて居た。これ、何を笑ふのぢや。

藤五　武士ともあるものが、女を喜ばさうとて歌をつくる。聞いてさへ可笑しいわ。

金王　姫君も笑ふて居た。

藤五　あの人も笑ふたか？

金王　笑はずには居られまい。その歌がまた滅法と馬鹿々々しいのぢや。

藤五　あの人が笑ふたところを見ると、其歌はそれほど拙いものではない。それにあの姫も熊谷の次郎を惡くは思ふて居まい。

金王　はあて。

藤五　女といふものは變つた化物ぢや。惚れれば惚れるほど相手の男を苦めるものぢや。表面は笑ふたと見せて、腹ではほめて居るのぢや。

金王　わしには分らぬ、（考へて）しかし姫君は誰の事でも笑ふ。そなたの事は誰よりも餘計に笑ふ。

藤五　（苦笑して）それは笑ひかたが違ふ。それにおれはあの姫を思ふては居ぬ。

（藤五は足ふみ伸ばして大の字に寢る。）

金王　また眠るのか。

藤五、　眠る外に何ぞ仕事があるか、酒はのまれず、喧嘩は出來ず！　あゝ〳〵。

金王　眠る前に聞きたい事がある。そなた、それほど女といふものを知つて居るなら、云ふて聞かしてくれ。姫君はな、畠山どのゝ顏を見るのを怖がつて居る。そなたのお主の聲音を聞くと、云ひかけた言も消えてしまふ。

（此語を聞くや。藤五の面には失望の色次第に著しく、やがて俄かに身を起し）

藤五　わつば、そちは恐ろしい鋭どい目をもつて居るな。おれが眠つてばかり居る間にそちはおそろしい働きを目にさせたな。

金王　わしが一目にらんだら、何一つ分らぬものはない。

藤五　全くぢや、そちの話を聞いたので、おれは妙な心地になつた。

金王　左樣らしい。死にさうな面つきぢや。

藤五　死にさうな？　いや死ぬよりももつと惡い。（飛び起きて）おれたちはもう此處には居られぬのぢや。

金王　日に照らされて寢て居るから惡いのぢや。その爲めに氣の狂つた人が澤山ある。

藤五　（尤奮して歩きまはる）まあ、考へさせてくれ。考へさせてくれ。

金王　つめたい水へ三度も頭をつゝこんだら、好い智慧が浮んで來やう。

藤五　（太刀をぬきそばめ）馬鹿、大抵にせえ、煩さいと、此刀を三度もたゝつこむぞ。

（金王は一種の輕蔑を示して上手へ退場。）

藤五　いや嘘ぢや。わつぱの邪推ぢや。が、これが事實になるまいものでも無い。（再び石に腰かけ額の汗を拭く）あゝ、恐ろしい事ぢや。恐ろしい事ぢや。

（金王は重忠を導いて入り來る。）

金王　あれに居ります。餘り度々日向で眠たので頭が狂つたと見えます。氣をおつけなさりませ。何をするか分りませぬ。

（金王舌を吐いて退場。）

重忠　やい、藤五、何とした。

藤五　（獨語のごとく）それ處では無いのぢや。

重忠　いよ〳〵頭がくるつたか。

藤五　左樣かも知れませぬ。（訴ふるが如く）若殿、さ、いふて下され、あなたはあの賣女（ばいた）めを思ふては居

ぬと。

重忠　これ、突然に何をいふ。賣女とは誰の事ぢや。

藤五　こゝの娘、あの紫とやらの事ぢや。

重忠　豐島どのこそは、この身にとつて再生の恩人ぢや。その息女を賣女などゝは無禮にも程がある。

藤五　その一言で若殿の心がよめる。あの樣な女に若殿の心を奪はれたら、三百餘騎の郎黨郎從、みな男衾を出てしまはう。

重忠　それは何故にぢや。

藤五　いふまでもない。源氏方の豐島の娘などゝ緣組するのが第一に無法ぢや。それにあの幽欝虫をその儘の娘どのに入られては、陽氣でもつた秩父の城が何とならう。酒も飲まれず、喧嘩三昧に日を送れずば、武士になるより百姓する。所詮あの女は畠山の敵ぢや。

重忠　（哄笑して）どの樣なものを嫁にぜうと、秩父の家風は秩父が守る。その心配は要らぬ事ぢや。

藤五　女にのろい和郎はいつもその樣な事をいふ。若殿とてこの淋しい場所を離れて、秩父の館へ歸られたら、流石に正氣はつくであらう。さ、直ぐにこゝを御立ちなされ。

重忠　（腹立しげに）物に狂ふも大概にせえ。

（藤五はしばらく氣を呑まれて默然たりしが、やがて涙を流して重忠の腕をつかみ）

藤五　若殿、さ、少しも早く故郷へ。

重忠　（ふりはらひ）おゝ、紫どのが來られる。あの人に話したい事がある。さあ、むかうへうせえ。

（藤五は稍少時躊躇せしが、やがて齒をかみつゝ憤然として上手に退場す。紫は母屋の方より入り來る。）

重忠　紫どの、五日前にわしのいふた語、まだ記えて居られうな。

紫　おほえて居りまする。

重忠　ではその御返事を承はらう。

紫　その返事は。幾たびもした筈ぢや。

重忠　あの様な返事は、わしの望みではない。

紫　もう、あの話はおいていたゞきませう。強ひて望みを遂げやうとなされたら、あなたの生命は無事ではないさうな。

重忠　（嘲笑して）あなたの父御に怒られて、此身が危いと分つたら、尙さら心は變へられぬ。

紫　それは無體といふものでござります。

重忠　左樣かも知れぬ。が、敵の劍の前も、女の目の前も、わしには一つぢや。誰が前でも言の腰を下げるのは卑怯ぢや。

紫　その樣にして女を嚇かすのも、卑怯ではござりませぬか。

重忠　その樣な事はわしには分らぬ。わしはたゞ思ふた女をわが物にしたいのぢや。あなたを妻に選んだのぢや。

紫　秩父の女たちは、その樣な思はれかたで滿足して居るのでござりますか。

重忠　それは知らぬ。わしには初めての戀ぢや。が、かくまで思はれた女は嬉しいと思ふべきぢや。

紫　嬉しいと？

重忠　坂東に名ある莊司の二郎が思ひを寄せた女ぢや。身のほこりにするが當りまへぢや。

紫　豐島太郎の娘は、これしきの事は何とも思ひませぬ。

重忠　なに、何とも思はぬ。（紫の方に近より、決然たる聲音にて）郎黨一人秩父へつかはして、もう婚禮の準備にとりかゝらせた。秩父の武者が云ひ出した言は、弦をはなれた矢ぢや。再びもとへは返らぬのぢや。

（云ひ棄てゝ重忠は、上手へ立去る。紫は羞恥と、憤怒と、恐怖とに身を悶えて、淋しく佇む。義近母屋より入來る。）

義近　金王めは何處へ行た。日毎に怠けかたが烈しくなる。見つけ次第に手足の折れるほど折檻せう。

紫　父樣、まあこゝに居て下され。話したい事がある。

（義近は紫の傍に腰かく）。

義近　娘、この頃は何とした。是までと違ふて沈んでばかり居るではないか。

紫　いえ、何ともござりませぬ。それよりは妾のこのむことを屹度適へると約束をして下さりませ。

義近　何ぢや、その樣な遠慮がましい。衣服でもほしいといふのか。

紫　いえ、衣服ではござりませぬ。

義近　それでは何であらうな。都ではやるとか聞く黄金の簪か。

紫　いえ〳〵、その樣なものでは無い。父樣、わたしはあなたの戀の話が聞きたい。

義近　（驚いて）なに、わしの戀の話を？

紫　わたしが母樣に別れたのは頑是ない時であつた。それでもあなたは母樣の話をして下された事はない。母樣の話をきゝたい。

義近　そなたの母は美しい人であつた。

紫　父樣は如何して母樣に逢はれたのぢや。如何して思ひ合ふたのぢや。如何して一緒になられたのぢや。さ、それを話して聞かせて。

（義近過去を夢みるごとく、額に手をあて茫然としてありしが、やがて身を起し）

義近　また話す機會（をり）があらう。

（紫も身を起して父の手をとり、又もとの位置に引戻して）

紫　父様、わたしはもう女ぢや。聞かせて下されてもよい筈ぢや。

義近　嘘の様な話ぢや。その頃は人の心もあらかつた。腕のつよいものが世の中を支配した。強いものには如何なる惡事も道理であつた。

紫　それが如何したのでござります。

義近　そなたの母は相模の大庭が娘であつた。

紫　では重忠どのと同じ平家方の。

義近　さうぢや。

紫　その平家方の娘を、どうしてお迎へなされたのでござります。

義近　（太息して）戀の國土に境はない。あゝ、思ひ出せば四十餘年の昔ぢや。相模境に狩鞍してのかへるさに、ゆくりなくも行き逢ふたは、そなたの母が野武士の手にとらへられ、淺ましい目に逢はふとして居る處であつた。

紫　まあ、物語にでもありさうな。それでもあなたは母様を。

義近　おゝ救つた。野武士の手からは救つたが、わしはもうそなたの母を親元へ還さう心にはなれなんだ。

紫　えゝ。

（義近は默然として、過去の追憶に打勝たれしごとく、たゞ大地を見つむ。紫は體内に潛める或力のうづき出せるごとく身を悶えて、父の兩手をしつかと執りながら）

紫　それから、それから？

義近　力づくに奪つて還つた。そのためにわしはあれの戀人をひとり殺した。大庭の家來を五人まで傷つけた。

紫　そして、そして？

義近　それから後は兩家の爭鬪ぢや。鮮血は双方から流された。あれの父はおれを呪ひ死に、死んださうな。

紫　あゝ、恐ろしやく！

義近　これ、靜かにせえ。それを見るが忌さに、今までは口を緘んで居たのぢや。

紫　でも、その樣なおそろしい。

義近　それもこれも過ぎた事ぢや。

（重忠上手より來る。）

重忠　御免くだされ。（行過ぎんとす。）

義近　（立上り）ま、お話しなされ。傷痍はどうぢやな。

重忠　御親子の御心盡しの效あつて、意外に早う快うなりました。

義近　その御禮では痛み入る。何事も相見互ひぢや。

重忠　あすは御暇いたさうと存ずるが、それにつけても遠からずわれらが方へおたづねを願ひたい。（紫の顏を見ながら）敵も味方も打忘れ、一家のごとき好みをもつて。

義近　（打笑ひつゝ）保元平治の事なくば、源氏平家の流れの末に、風波立つることもあるまいに、思へば武士ほど片意地なものは無い。が、其中には御雜作にあづかる時節も來るであらう。

重忠　（わざと紫に向ひ）その時には御息女にも。

紫　（紫つと身を起して父の手をとり）父樣、まだ話したい事がある。さあ、參りませう。

（親子は母屋の方へ行く。重忠は二人を見おくる。藤五又登場。）

藤五　あれほど迄憐れをかけた家來の事も忘れ果てゝ、彼女を見つめて居る淺ましさ、わしはもう……

重忠　默れ下郎！　それほど此重忠が氣に入らずば、いづこへなりと主取りせえ。

藤五　（驚いて）なに、他家へ主取りを？　此藤五の心さへ分らぬ樣になつたとは、たしかに心が狂はれたに相違ない。此上は有無を云はさず秩父へ連れもどり、正氣になるまで押こめ置くのぢや。

（藤五、重忠をつかまんとす。重忠身をかはして藤五をはづし、扇をもつて其頭をうつ。藤五地に倒る。）

重忠　馬鹿め。

（冷然として退場。

藤五疼痛をこらへてわづかに身を起す。）

藤五　魂ひの腐つたには似ず、武勇はさして變りはない。それにつけてもあの心の迷ひをなをす工夫はないものか。

（西行阪路をのぼり來る。）

藤五　法師どの、聞きたい事がござる。

西行　何ぢやな。

藤五　戀に心の狂ふた男を、正氣にかへす工夫はござるまいか。

西行　（あきれ顔にて）ほゝう、そなたが戀に狂はれたかな。

藤五　わしが、戀に？　戀とわしとは仲違ひぢや。

西行　如何にも左樣らしい顔ぢや。してその戀に狂ふた男といふは誰ぢやな。

藤五　わしの主人ぢや。

西行　（笑ひかけて）うむ。莊司の二郎か。二郎どのも物のあはれを知るやうになつたか。

藤五　えつ。

西行　そなたには分るまい。二郎どのなら戀に身をくはれて死にもせまい。ま、ま、棄てゝ置くがよい。

藤五　えゝ、その樣な事をしたら……

西行　このわしでさへ北面の武士であつた時には、つれない女にあこがれて一夜も二夜も待あかした事さへある。若い時には一度づゝは誰しもかゝる流行病ぢや、生命までは別條ない。棄てゝ置くが第一の療治ぢや。

（西行は笑ひながら母屋の方へ去る。）

藤五　賣僧め、おのが若い時ののろけまで吐き居つた。もう此上は誰に便らうまでもない……

（沈吟の裡、紫先きに熊谷直實母屋より入り來る。）

紫　おゝ藤五どの。

（藤五、紫を一睨して、つと阪路の方へ立去る。）

紫　をかしい人ぢや。わたしを怖ろしいものか何ぞの樣に。

直實　そなたを恐れる人は賢い人ぢや。わしのやうにつき慕ふはおろか者ぢや。

紫　聞きともない。もう止して下され。

直實　平六めの云ふ事なら、よろこんで耳を貸さうに。

紫　あい、彼の人は歌が巧みぢや。

直實　わしとても歌はよんだ。

紫　あれは歌ではない。秀重どのゝとは比べやうもない。

直實　またしても平六ぢや。秀重ぢや。三日三晩まんじりともせで詠んだ歌でさへ、その樣にさけすまれるはあの平六めの有るがためぢや。いまに思ひ知らしてやるわ。

（忽然として阪路の下へ馳け行く。すれ違ひさまに金王上り來り、直實を見おくりて）

金王　次郎どのが怒つたわ。こりや面白い、いよ〳〵果し合ひが見られるな。

紫　そなたは何をいふてぢや。

金王　昨夕かけて置いた兎罠を見に、砥島の森に行たら、平六どのが家來をあつめて、太刀打の稽古をして居た。あの詠歌者も今は武藝に懸命ぢや。

紫　でも、西行法師の說得で、ふたりは勝負をせぬ事になつた筈ぢや。

金王　その後に平六どのが、次郎どのゝ歌を笑ふたといふ話をしたら、次郎どのはえらう腹を立てゝ、誓を破つても平六どのを殺すといふて居た。やつ、又藤五の氣ちがひめがやつて來た。

紫　ほんに心が如何ぞして居るらしい。

金王　日向で眠た所爲ぢや。うつかり話をなされぬがよい。

（藤五悄然として阪路を上り、上手へ赴かんとして何やら思ひ當りしごとく、うなづきつゝ紫の方へすゝむ。）

藤五　姫君。

金王　（獨語のやうに）今度は馬鹿に丁寧になつた。

藤五　わしは今一大事をきいて來た。

紫　何事ぢや。

藤五　豐島河原で果しあひが初まりさうぢや。

紫　えつ。

藤五　云ふまでもなく、熊谷どのと葛西どのぢや。事の起りはあなたぢや。

金王　（躍りあがつて）有難い。いよ〳〵勝負ぢやな。

（金王は飛ぶが如くに阪路を下り去る。）

紫　どうでも果しあひになりさうか。

藤五　武士の刀に手がかゝつたら血は流れずに居る筈はない。

紫　あゝ、如何ぞして止める工風はあるまいか。

藤五　それは易い事ぢや。

紫　それは何として。

藤五　どちらか一人の妻になるのぢや。

紫　（驚きて）えつ。

藤五　えゝ、ぐづ〳〵して居る時はない。どちらか一人死ぬのぢや。さあ、どちらを取る御心ぢや。

紫　わたしはどちらも……

藤五　一人は武藏七黨の旗頭ぢや。一人は都に名だかい詠歌者ぢや。さあどちらを取る御心ぢや。

紫　でもわたしは二人とも心に染まぬ。

藤五　併しあの二人は、わしの主人などゝは違ふて、心もけだかく氣はやさしい。あの樣な人たちの妻となつたら僥倖ぢや。

紫　そなたの御主はその樣に惡い人か。

藤五　惡いの何のといふて、わしの若殿ほど惡人は此世にあるまい。放埒、無慚、親には不孝、妻には無慈悲……

紫　（笑ひをしのびつゝ）あの人にはもう妻があるのか。

藤五　いや、有つたらさうもあらうと思ふのぢや。あの樣な了見では、縱令女房を迎へ取らうとも、衣裳も買ふてはやるまい。調度も與へはせまい。氣に入らぬ事があつたら、たぶさつかんで屋敷中を引ずりまはさう。

紫　お、恐ろしや、恐ろしや。（何やら思ひつきし如く）成程かねて聞いた通りぢや。人の噂に違はぬならず者であつた。

藤五　（俄かに容を變へて）なに、ならず者？

紫　左樣ぢや。悪人、耻知らず、女たらし……

藤五　（卒然身を起して太刀ぬきそばめ）嘘も事にこそよれ、おらが若殿を悪人とは誰がいふた。耻知らずとは誰が吐した。（脅迫的に紫の方にすゝみ）さあ、其嘘吐きの名をいへ。名をぬかせ。武藏一國たづねめぐつても、屹度此禮はしてやるのぢや。女、さあ、その當の奴の名をぬかせ。

紫　さあ、其人の名はな。

藤五　その人の名は。

（紫は指をまはして、方々を指しながら、最後に藤五の顏をつくばかりにして）

紫　この人ぢや。

藤五　な、なに、おれぢやと？

紫　自分のいふた事さへ信實とは思はぬ男、重忠どのからこのわたしを離さうためとは初めから見て取つた。これ、藤五どの、そなたは何故その樣にわたしを嫌ふのぢや。

藤五　かうなつたらもう隱しだてはせぬ。あなたに怨みつらみはないが、若殿は平家方、あなたの父御

は源氏の利けもの、思ひ合ふてもむだな事ぢや。それ故わしは二人の仲が裂きたいのぢや。

紫　（沈吟して）わたしの母様は、平家方の大庭の娘であつた。それでも源氏方の父様と縁組した。

藤五　（愕いて）えつ、あなたの母御は相模の大庭か。ふむこれは不思議ぢや。

（重忠入り來る。紫おどろいて起上り、こゝを去らんとす。重忠手を上げて之をとゞむ）。

重忠　藤五、馬をひけッ。

藤五　何となされます。

重忠　明日は秩父へ還るのぢや。けふは骨だめしぢや。

藤五　有難いことぢや。

（藤五阪路を下る。）

重忠　（紫に）今の語を聞かれたな。

紫　はい。

重忠　して、わしへの返事は？

紫　（神經的に、母屋の方へ身を退きつゝ）同じ事ぢや。

重忠　わしは力づくで、そなたを奪ひ去らうとは思はなんだが……（紫の逃げんとするを引とらへ）まあ、聞かれえ。明日、わが出立の砌、快くわが心に從がはゞ兎に角、たつて不承知とあらば、この豐島が

館に血の雨が降らうも知れぬぞ。

（義近母屋より登場。此體を見て、呆れ、驚き、茫然として立つ。重忠は紫を離しながらも冷然として義近の前に立つ。）

義近　娘に對して何とする。

重忠　秩父が妻に申し受けたのぢや。

義近　なに申し受けたと。（太刀に手をかけ、脅かす如くにすゝむ。）わしの許しを受けやうともせで……日頃の恩も打忘れ、人の娘を奪はん所存な？

重忠　源平二つに立別れては、晴れての祝言はもとより成るまい。それ故斷なく連れて行くまでぢや。

義近　不義は武門の瑕瑾ぢや。娘を渡す其前に、その成敗をしてつかはす。

重忠　おう、望むところぢや。

（兩人大刀に手をかけ、互ひに進み寄る。西行法師母屋より走り來る。）

西行　まづ、待たれよ、秩父どの、こゝはそなたが再生の恩人の住居ぢや。この豐島の館に血を流しては、武士の義理が立つまいぞ。

重忠　これは法師の云はるゝ通りぢや。

義近　さらば、彼方の森蔭にて待つがよい。われもあとよりつゞいて行くわ。

重忠　その詞を忘るゝな。

義近　何を？

（意氣込むを紫身をもつて之を支ふ。）

重忠　（紫に）重ねて迎へにまゐるぞ。

（藤五阪路を上り來る。）

重忠　馬は？

藤五　阪下にひき据えてござる。

重忠　さらば行かう。

（兩人胸壁の下に消ゆ。

紫は尙も父の身に抱きつく。）

西行　豐島どの、馬鹿者ぢや、棄てゝ置かれえ。

紫　ほんにあとを追ふのは止めにして。

義近　卑怯者とさへ思はれずば。（胸壁の側に寄り、崖下を俯瞰して）おゝ、馬をくだつて森蔭にわしを待つて居る。阪東武者の名折れぢや。行かずには居られぬ。（西行に）法師どの、屍をあの森蔭に曝す前、塗籠へ來て後世の菩提を賴み申す。

（義近は母屋の方へ行く）。

西行　（悲しげに）わが力ではこの愚かしい人間の爭ひをとゞむる事は出來ぬのか。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

（兩人退場。やがて母屋の方に讀經の聲聞ゆ。紫は涙をとゞめ、いそぎ胸壁の前に來り、狂へるごとく崖下を見詰む。金王は蹣跚して阪路を上り來る。）

金王　豐島河原はとう〳〵血を見た。平六どのがたゞ一太刀でやられてしまふた。（紫が此一大凶報に耳を傾けぬを訝かりつゝ、胸壁の側へ來りて、その眺めつゝある方に目を走らす。）あゝ、あれは秩父どのと藤五めぢや。二人は馬から下りて居る。

紫　（放心せる人の如く）母屋へ行て、被衣を取つて來や。

金王　どの被衣を。

紫　どれでも好い。

（金王は訝かしげに紫を一瞥して母屋へ走り入る。紫はまはりをいそがしく見、やがて一散に阪路をくだり去る。

日光稍くらし、落葉しげし。）

しばらくして金王は被衣を携へて母屋より出で來る。）

金王　これでよろしうござりますか。

（紫の袋を見出し得ざるに驚き、あたりを見まはせし後、思はず驚きの叫び聲を出し、被衣を落す。）

金王　殿！　殿！

（義近と西行と母屋より走り來る。金王は崖下を指し）

金王　あれが姫君ぢや。二人は姫君を迎へに來た。

（義近は額に手を翳して、じつと崖下を見つむ。）

金王　あゝ二人は姫君と一緒になつた。……秩父をさして駈けて行く。

義近　馬ぢや！　馬ぢや！　義近の馬ひけつ！

（義近は太刀を拔きかざして走り去る。金王その後を追ふ。

斜陽、落葉、蟲聲。

西行淋しく秋風の裡に立つ。）

——幕——

大正十四年二月一日印刷
大正十四年二月五日發行
大正十五年八月一日再版印刷
大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集
第三卷

著者　松居松翁　高安月郊　山崎紫紅　伊原青々園　岡鬼太郎

發行者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　中塚榮次郎

印刷者　東京市下谷區二長町一番地　守岡功

印刷所　東京市下谷區二長町一番地　凸版印刷株式會社

發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座七八三番二一八八番
振替東京五二二九八番

（非賣品）